
【悲恋注意！】 【うた腐】 Dearest 【レントキ】 【悲恋注意！】

たかむら伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【悲恋注意！】 【うた腐】 D e a r e s t 【レントキ】 【悲恋注意！】

【Nコード】

N0662Z

【作者名】

たかむら伊織

【あらすじ】

p l x i v と同時投稿です。

(前書き)

ハッピーエンドとは言えません。いえ、二人は愛し合っているんですが、それでもハッピーエンドとは言えないんです…。ううう。

苦手な方はお戻りください。

浜崎あゆみちゃんのDear estです。こういう解釈無しですかね。無いですよね…orz

さて、次、pixivに上げるとしたら、カクテルの続きかな？

いや、こういうこと言っても守れないのでやめときますが(苦笑

本当に大切なものの以外 全て捨ててしまえたらいいのにね
現実はまだ残酷で
そんな時いつだって 目を閉じれば
笑ってる君がいる

レンは通い慣れた早乙女学園の池のほとりに長身を投げ出して、風
に髪が流されるのに任せていた。

何かにつまづきそうになった時。

何かを静かに考えたい時。

レンはいつもここに来た。

ここにいれば一人じゃないと思えたから。

必ず、一緒にいてくれた人のことを思い出せたから。

レンはそつと目を閉じた。

きつと自分のためだけの。

とびっきりのあの笑顔。

目を閉じればいつもその笑顔に会えた。

「トキヤ…ありがと…」

レンはその笑顔に向かってそっとつぶやいた。

人間は皆悲しいかな

忘れゆく 生き物だけど

愛すべきもののため 愛をくれるもののため
できること

「で、なんで俺たちが呼ばれるのかな？」

「レン！」

マネージャーと共に説明室に呼ばれたレンは椅子に座りもせず
最初から喧嘩越しだった。

気に入らなかった。

なぜ、ここにトキヤを呼ばない？

それは…トキヤに聞かせられないという意味なのか？

「それでお話というのは？」

マネージャーの問いかけに、医師は意識してか軽く咳払いをした。

「一ノ瀬さんに…腫瘍が発見されました」

「腫瘍？」

「はい。はつきりしたことはもっと詳しい病理検査の結果を待たなくてはいいませんが、恐らくは悪性の多形型腫瘍かと…」

「そんな病名聞きたかないね。どうすれば治るかそれだけ話してくれればいいんだよ」

レンの言葉に、医師は目をそらしてレントゲン写真の方を向いた。

「治療法は…すでに延命のためのものしか残されていません」

「…延命？」

「予後は…恐らく三ヶ月」

「先生、素人にも分かるように説明してもらえるかな？ どうしてそう遠まわしな言い方をするのか、俺にはよく分からないんだけど」

「…余命は長くて三ヶ月。手術をしてもそれほど長い時間を伸ばすことはできません。一ノ瀬さんはまだ若いので手術をする体力はありますが…それ以上に進行が早くて…どうにも…」

それ以後の医師の言葉は、レンの記憶には残っていない。

気がつけば、レンは病棟を飛び出していた。

誰も来そうにない建物の裏手で。

レンは小学生の日以来、本気で泣いた。

次々と溢れ出る涙は、自分の無力さに対する悔しさのため。

トキヤを失うという恐怖のため。

大切なものが自分から去っていくという悲しみのため。

やっと手に入れた唯一の存在を失うという喪失感。

「トキヤ…なぜ…トキヤが…ちくしょう！」

トキヤの名前を呼び続けるレンの後ろ姿に…誰も声をかけることができなかった。

いつか永遠の 眠りにつく日まで

どうかその笑顔が 絶え間なく ある様に

「やあ、ハニー。おまたせ」

「誰がハニーですか」

「そういう時ははい、ダーリンと答えるもんだよ。他に誰もいないからいいんじゃない？」

「そういう問題じゃありませんよ」

そう？と言いながら、レンは近くにあった椅子を引き寄せてそこに腰掛けた。

「元気そうだね。もう退院してもいいんじゃないの？」

「そう…ですね。みんなも元気ですか？」

「あゝ、もううるさいくらい元気さ。特に翔がね。相変わらず」

「そうですか…」

グループのメンバーは一度一緒に病室に顔を出して以来、病室には来ていなかった。

自分が病院に行くのは、誰も止めたりしない。

むしろ、なんとか時間を作ってくれるくらいだ。

それがレンには不思議だった。

「なんだかんだ言って、またみんなで来るさ」

「レン…」

「ん？」

「みんなには…来ないでくださいとお願いしてるんです…」

「そうなの？ そんなに俺と二人がいい？」

茶化したレンの言葉に、トキヤは静かに首を左右に振った。

「弱っていく姿は…見せたくないの」

下を向いてつぶやくトキヤの顎に手を伸ばして、レンは自分の方を向かせた。

「どうして弱っていくなんて思うの？　治すためにここにいるんだろ？」

「レン…あなたは知っているのでしょうか？」

「なにを？」

「HAYATOの時、こういうドラマに出たことがあります。その中にこんなセリフがありました。『自分の身体のことだぜ？　気づかないと思ってた？』そんなことは現実には無いと思っていました」

「何を…」

「分かるんです。不思議なものですね」

「ITCHI…病室にこもるからそんなことを考えるのさ。ちょっと散歩にでも行くかい？」

溢れでてきそうになる感情を必死で抑えて、わざと軽い調子で言うレンに、トキヤは静かに首を左右に振った。

「レン…手を貸してください」

「なんでもするよ。いつでもOKさ」

「…そうではなくて、今、手を貸してください」

トキヤからそういうことを口にだすのは珍しい。レンはそっと右手をトキヤの方に伸ばした。

その手を握って。トキヤはひとつ深呼吸をした。

「先生に無理を言って話していただきました。もう延命のための治療しか残っていないと。患部に直接致死量の抗癌剤を注射したり…そういった方法しかない。私は…延命のための治療は全てお断りしました」

医師には絶対にトキヤには告知しないという約束をしていた。

なのに、何をペラペラと話しているのか。

レンは怒りに満ちた表情で立ち上がった。

「待ってください」

トキヤはレンの手を力をこめて握った。

「私が無理にお願いしたんです。先生は悪くありません。私を動揺させまいとするレンの気持ちも嬉しかった。だけど、やはり本当のことが知りたかった。すみません」

「トキヤが…謝るところじゃないだろ？ 俺の…勝手な判断と…みんなの意見が一致したんだ。だけど…トキヤが知ることを望むのなら…それはトキヤの意見が優先されるべきさ」

「そして…お願いがあります」

「どんなお願いだろう？」

「ST☆RISHは…解散させないで欲しいんです。だけど…私以外の誰かをメンバーに加えることもして欲しくないんです」

「そんなことするはずないだろう？」

自分の手を握るトキヤの手が、小さく震えているのを感じながら、レンは必死で自分の感情を抑えて、優しく答えた。

「ST☆RISHは俺たち6人と…そしてレディの7人のグループさ。それは絶対に変わらない」

「ありがとうございます。そしてもうふたつ」

「ふたつでいいの？　いくつでもお安い御用だよ」

「ふたつでいいんです。あなたが私を思い出す時に、笑顔の私であるようにこれからは私の笑顔だけ覚えていて欲しい。そして、私の心の中に残るあなたがいつも笑顔であるように…ここに居る間は笑顔だけ見せて欲しいんです」

「分かった…」

「それと…私がいなくなったら…あなたは悲しまないで…新しい…」

「イッチー！」

レンは握ったトキヤの手に自分の顔をうずめた。

「聞きたくない…。トキヤがいなくなったらとかそんな話は今聞きたくない。どうして…どうして今そんなこと…どうして…」

「レン…」

トキヤは自分の手の上にレンの涙が落ちるのを感じて、目を閉じた。

「今…今どうして過ごすか考えよう…。二人で…どうやって過ごすか考えよう」

「レン…私は…本当は怖いんです」

涙まじりのトキヤの言葉に、レンはその細い身体を抱きしめる。

「大丈夫。俺はここにいるから」

「あなたに忘れられたくない…。だけど…それはあなたの幸せにならない…。でも…あなたの記憶から私がいなくなったら…」

「俺がトキヤのことを忘れるはずがないだろう？　ねえ、トキヤ…トキヤは俺がそんな薄情な人間だと思ってるのかい？」

「違います…。だけど、あなたに残された長い時間を一人で過ごしてくださいとは…そんなわがままは…私には言えない…」

レンはトキヤの額に自分の額を押し付けた。

涙に濡れた二人のまつ毛が触れ合うほど近い距離。

「トキヤ…それはわがままじゃない。だから大丈夫、心配いらない。何も心配いらないから」

そして、そつとレンはトキヤにくちづける。

「誓いのキスだよ、トキヤ」

「…何を言っているんですか、あなたは」

そして二人は顔を見合わせて、とっておきの笑顔を見せた。

出会ったあの頃は 全てが不器用で
遠回りしたよね 傷付合ったよね

「トキヤ！」

すぐに来るように連絡をもらったレンは、使える物は全て使ってトキヤのベッドの脇に立った。

「…レン……」

酸素マスクをしているトキヤの声が遠い。これだけの距離なのに声が遠い。

レンは近くにあった椅子を引き寄せて腰を下ろし、トキヤの口元に耳を近づける。

「トキヤ…レディが新曲を作ってくれたよ。見るかい？」

「そうですか…。歌って…いただけますか？」

レンはまだ歌詞のついていない曲のメロディを自分の声で奏でた。

「みんなで歌詞をつければ、またすごい曲になるよ」

「…そうですね。きっと素敵な…皆さんに愛される曲に…」

そこまで言うと、トキヤは自ら酸素マスクを外した。

そっと佇んでいた医師が慌てて付け直そうとするが、レンはそれを全力で押しのけた。

今は…トキヤの望むことをさせてやりたい。

トキヤの希望を叶えてやりたい。

誰でもない、トキヤ自身の意思なのだから。

「レン…今までありがとうございます…」

「違うよ、トキヤ。これからよろしく…でしょ？」

「…そうですね。許されるので…あれば…そう…言いたい」

「言っ…ていいんだよ、トキヤ。むしろ言われたんだよ、トキヤに…」

「好き…です…。これも…言っておきましょうか…」

「何度だって聞くよ。それが一番嬉しい言葉さ」

トキヤはレンの顔を見て、ふっと笑顔を見せた。

レンもそれを見て笑顔を返す。

そして。

そつと目を閉じたトキヤは、二度とその目を開けることがなかった。

医師の確認がすみ、ふたりきりになるのを待って、レンはトキヤの頬にそつと手を触れた。

「俺を一人にするなんて…トキヤは…どういうつもりなの？　ねえ、トキヤ…俺はこれからどうすれば…いいんだよ？　お願いだからもう一度目を開けて」

目から大粒の涙が流れているのを、レン自身は気づいているだろうか。

「トキヤ…俺たちはこれからだろ？　まだまだやってないこといっぱいあるだろ？　やりたいこといっぱいあるだろ？　なのに…俺をおいていくの？」

レンは意識せずに、ベッドの清潔なシーツを握りしめた。

「新曲…一緒に歌いたかった…。もう一度同じステージに立ちたかった。俺が…どれだけトキヤのことを大切に思っているか伝えたかった…。トキヤ…トキヤ…」

それから、長い間、レンはトキヤに話しかけ続けた。

きつとまだ聞こえると信じて。

きつとトキヤに届くと信じて。

出会ったあの頃は 全てが不器用で
遠回りしたけど 辿りついたんだね

あの日から何をしていいのか分からず、ぼんやりしているレンのもとにひとつの封書が届いた。

宛名は自分の名前。そして、差し出し主は…一ノ瀬トキヤ。

レンは慌てて、封筒を開ける。

そこには、紐でくくられた髪が一房丁寧に髪で包まれて入っていた。
夜が明けきる前の空の色。いつもいつも自分が目で追っていた髪の色。

そして。

ボイスレコーダー。

少し震える手で再生のボタンを押す。

そこには懐かしい、愛おしいトキヤの声。

『あなたは今、どのような生活をしているのでしょうか。きちんと私との約束を守ってくれているのでしょうか』

『覚えているでしょうか。私たちが一番最初に出会った日のことを…』

『忘れないでください。私たちが過ごした大切な日々を…』

覚えているでしょうか。

そして。

忘れないでください。

その繰り返しに、レンは笑顔寸前の表情を見せた。

「俺を誰だと思ってるの。忘れるわけないだろう？ 覚えているにきまっているだろう？」

返事が無いのを承知で、レンは髪にそつと話しかけた。

目を閉じれば…いつも照れているような、どうしたら笑顔になれるのか悩んでいるようなそれでいて一点の曇りもないトキヤの笑顔。

トキヤは約束を守ったのだ。

ならば、自分もトキヤとの約束を守らなければ。

トキヤはきつと自分を見ていてくれる。

だから。

立ち上がって歩き出すのだ。

これからもトキヤとともに歩いて行くのだ。

トキヤの髪にキスをして。

レンは前に進むために立ち上がった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0662z/>

【悲恋注意！】 【うた腐】 Dearest 【レントキ】 【悲恋注意！】

2011年12月2日17時54分発行